

文化財保存修復に関する講演会

キャンバス画 の修復について

2026

10.31(土)

13:20 - 16:10

(13:00 受付開始)

主催

国立アトリサーチセンター

東京文化財研究所 保存科学研究センター

東京藝術大学 大学院美術研究科

会場

東京文化財研究所 地下セミナー室

参加費用

無料

参加方法

事前申込制 (90 名先着順)

お申込はこちらの QR から→

申込締切：10 月 22 日



※講演会の同時配信はございません。

開催趣旨

キャンバス画の修復において、構造の強化を目的とした処置は、オリジナル作品への介入度が高く、長年課題とされてきました。なかでも、絵具層と木枠に挟まれ、脆弱化しやすい支持体として構造強化を要する場合の多いキャンバスは、多くの場合、接着剤を浸透させ張り直しをすることによって補強されてきましたが、再処置にあたり課題を残している作品も少なくありません。作品のオリジナリティを保ちながら、最小限の介入によって傷んだキャンバスを補強するための方法は、材料の実験や技術の開発、修復理念の発展を通していまだ議論されています。

このたびの講演会では、日本とヨーロッパでそれぞれ 20 年以上キャンバス画修復に携わり、材料や技術の研究を重ねてきた渡邊郁夫氏(修復研究所 21 所長)とケイト・シーモア氏(Art Conservation Education 代表)をお招きし、様々な特性を持つキャンバス画の修復を通して得られた新たな技術的知見をご紹介します。

プログラム

13:00 - 13:20 受付

13:20 - 13:30 開会挨拶

13:30 - 14:15 講演 1：渡邊郁夫「作品の独自性にまつわる二つの修復事例」

14:15 - 14:30 休憩 (15 分)

14:30 - 15:15 講演 2：ケイト・シーモア「Layers of Legacy：ワックス樹脂で裏打ちされたキャンバス画の材料の識別、工業ワックスの変遷、再修復の指針」

15:15 - 15:30 休憩 (15 分)

15:30 - 16:00 質疑応答とディスカッション

16:00 - 16:10 閉会挨拶

講演者プロフィール



渡邊郁夫 WATANABE Ikuo

東海大学教養学部芸術学科卒業。創形美術学校造形科修了。1987 年から学校法人高澤学園創形美術学校修復研究所研究員(現、修復研究所 21)を務め、2014 年より同研究所所長。1996～1997 年、文化庁在外研修(ドイツ、ベルリン美術館群ラトゲン研究所およびプロイセン城郭庭園財団)。プロイセン城郭庭園財団サンスーシ宮殿絵画修復工房客員研究員、東京藝術大学非常勤講師、東海大学非常勤講師を歴任。2016 年、文化財保存修復学会業績賞受賞。



ケイト・シーモア Kate SEYMOUR

美術史家、絵画修復家。1999 年以降オランダに移り、リンブルフ修復研究所での 25 年間の勤務を通して、欧米各国での絵画修復の実務に加え、教育部門のトップとして専門家の育成に携わる。2024 年には Art Conservation Education を起業し、独立。アバディーン大学美術史修士課程修了、ノーサンブリア大学修士課程絵画修復科修了。キャンパスの構造的な修復、最小限の介入に留意した裏打ち処置、材料科学の教育を専門とし、世界各地で講義やワークショップを行っている。

講演概要

講演 1

渡邊郁夫「作品の独自性にまつわる二つの修復事例」

修復で大切なキーワードである「オリジナリティ」に関しての二つの修復例を取り上げます。

ひとつ目は、藤田嗣治によるキャンバス画の修復計画を立てるために行った画面の調査において、藤田独自の技法を解き明かす可能性を秘めたタルクという物質を発見した事例です。タルクと藤田の表現についての関係を、科学調査も含め複数の面から長期間調査したことで、オリジナルの技法として使っていたことが分かりました。ふたつ目は、アンゼラム・キーファーによるキャンバス画のもつ特殊なオリジナルの状態を、どのように守っていくかについての事例です。キーファー作品は、もともと緩く張られたキャンバスの不安定さのために、作品自体の損傷を招いていました。今回は緩い張りの状態をオリジナルの状態と考え、それを保ちながら損傷を軽減する処置を施しました。実際に取り組んだ裏面からのアプローチを紹介します。

講演 2

ケイト・シーモア「Layers of Legacy：ワックス樹脂で裏打ちされたキャンバス画の材料の識別、工業ワックスの変遷、再修復の指針」

キャンバス画の裏打ちは、損傷した原画に別のキャンバスを接着して補強する手法として知られています。19 世紀には、非水性の接着剤であれば湿気の影響を受けないという考えのもと、水性の糊に代わってワックス樹脂が裏打ち接着剤に使用されるようになりました(オランダ式)。しかしその後の研究で、ワックス裏打ちされた作品は湿度変化に依然として敏感であるだけでなく、変色、脆弱化、織目の干渉、重量化といった深刻な影響を及ぼすことが分かっています。裏打ちされた作品に対する再処置には、標準化された手順がなく、当初の裏打ちに使用された材料や道具を特定した上で適切な対応を模索する必要があります。本講演では、裏打ち作品の再処置方法について議論し、低圧・低温で実施する「ミスト・ライニング」を、熱や湿気、接着剤の浸透を伴わずに作品を安定化させる、軽量で再処理可能な裏打ち法として紹介します。